

## 金日成・金正日主義は社会主義の新しい教義

マルクス・フィードラー

フランケン・チュチェ研究会会長

チュチェ思想によれば、マルクス・レーニン主義は「社会主義の先行教義」である。自主の時代に移行したため、「歴史は労働者階級の世界観を新たに完成することを要求した」

金正日総書記によると、「社会主義を新たな土台の上に引き上げるという歴史的課題を見事に解決した」「チュチェ思想を確立し、これを土台に社会主義の理論を創造的に発展させた」のは金日成主席である。

この理論は、朝鮮革命の経験に基づいている。金正日総書記は、朝鮮人民が社会主義のための闘争を「植民地・半封建社会の後進的状况の中で」始めたと指摘する。そして、「異常に困難な状況の下で革命が実現し、建設が遂行された」のは、党が金日成・金正日主義の精神に基づいて人民大衆を組織的・思想的に自らと指導者の周りに団結させたからであると述べている。党は社会主義建設において思想活動と人間改造を優先させたので、建設を加速して革命を強固にすることができたのである。

金日成・金正日主義が示した新しい社会主義理論も、社会主義と共産主義を区別し、社会主義は共産主義の前段階に過ぎないと考えている。「社会主義と共産主義は、その発展段階と成熟度が異なるだけで、共通の政治・経済・思想的基盤を持つ同種の社会である。社会主義は、共産主義の前段階として、その固有の仕様として共産主義的性格を持っている。したがって、社会主義のさらなる発展と完成は、共産主義を構築する過程である」

金日成・金正日主義は、思想意識を社会発展の主要因と見なしているので、社会主義の構築においても、人々の思想意識の変革を優先課題としている。人々の物質的利益を優先する代わりに、「社会主義思想の精神に基づく教育」という手段を使うべきである。物質的な刺激を最優先に考えれば、社会主義は構築できない。「物質的な利益だけを優先させれば、人々は自分の利益だけを考えるエゴイストに墮落し、社会は沈滞し、社会主義の基礎が崩れてしまう」

1994年、金正日総書記は綱領的な論文「社会主義は科学である」を著した。東欧圏が崩壊して西欧資本主義の勝利が決定的になったと思われ、アメリカの哲学者フランシス・フクヤマが歴史の終わりを宣言した頃のことである。

その中で金正日総書記は、現在の世界の状態は内部矛盾に満ちており、資本主義はあまりにも多くの苦しみを生み出しているため、安定した最終状態にはなり得ないという意見を述べている。資本主義はすべての国を徐々に征服するのではなく、世界に不平等

を生み出している。大衆の主権は、対立的な階級社会では実現できない。私有財産に基づく社会は、常に社会的不平等の拡大、搾取と抑圧を生み出す。

金正日総書記によれば、「社会主義の裏切り者」が「資本主義に対する幻想」を広めたのは、「この時代遅れの社会を回復するため」であった。金正日総書記は、1980年代末にソ連とその東欧の同盟国が直面した困難な状況について、マルクス・レーニン主義を意味する「以前の社会主義の教義」の「歴史的な限界」を一定の範囲ではあるが指摘しているが。しかし金正日総書記によれば、金日成主義・金正日主義によって検証されたのはまさにこのような弱点であった。

「社会主義を新しい...基盤の上に引き上げるという歴史的課題は、チュチェ哲学によって見事に達成された。社会主義を新しい土台の上に引き上げるという歴史的課題は、偉大な領袖である金日成同志がチュチェ思想を創始し、これを土台に社会主義理論を創造的に発展させることによって見事に解決された...。金正日同志が科学的に体系化した社会主義理論は、人間に主眼を置き、人民大衆を中心に据えている」

これに対して、社会主義が失敗した国では、社会主義の理論を発展させ、完成させることができなかつたと述べた。しかし、「社会主義思想を絶えず発展・完成させ、大衆にしっかりと身につけさせ、彼らが社会主義を揺るぎない信条とするようにする」ことが必要であると述べた。社会主義の大義の正しさをしっかりと確信したとき、彼らは社会主義を信じるようになるだろう。

金日成・金正日主義は、人民大衆が社会運動の主体であることを明確にしている。だからこそ、思想の領域に重点を置かなければならないのである。「社会主義社会では、人間の再教育と思想的変革が、物質的経済的条件の整備よりも重要で緊急な課題であることがわかる。人間の再教育が優先されて初めて、革命の主体を強固にし、その役割を強化し、社会主義の建設を成功させることができる」しかし、これはまさに東欧圏の現実の社会主義で無視されていたことである。「社会主義社会において、大衆の思想的再教育を無視して、革命の主体を固め、その役割を強化することができないまま、客観的な物質経済的条件... を決定的に重視するならば、社会主義建設全体を適切に進めることはできず、経済建設自体が停滞から解放されない」このような現象は、かつて社会主義を形成していたある国でも、まれに発生していた。社会主義の反逆者たちは、これを機会に「ペレストロイカ」という競争に参加し、反革命的行為を行い、社会主義経済秩序そのものを破壊してしまった。

金正日総書記は、東欧の社会主義が失敗した原因を、外国勢力の策略に加えて、東欧圏諸国の主権の欠如にもあると考えていた。彼らはマルクス・レーニン主義を自分たちの状況に合わせて創造的に適用するのではなく、ソ連を盲目的に模倣したのである。金正日総書記によれば、東欧諸国は「マルクス・レーニン主義の指導原理を単に採用しただけ」であった。時代は変わり、その国の具体的な現実は異なるのだから、既存の経験を絶対化したり、独断的に採用したりしては、社会主義を正しく確立することはでき

ない。

金日成・金正日主義は、歴史上の社会主義運動の経験进行处理し、歴史からの教訓を引き出した、現代の社会主義の新しい学説である。